



ママさんの告白日記

著者との了解
により検印は
廃止します

昭和三十九年三月二十日 印刷
昭和三十九年三月二十五日 発行

定価 三三〇円

著者 園生義人

発行人 土井 勇

印刷人 山森 忠一

発行所 青樹社

有限
会社

東京都千代田区
神田三崎町二ノ三〇
電話(281)九七六六番
振替東京四七六四八

―落丁・乱丁本はお取替え致します―

若奥さまシリーズ

ママさんの告白日記

園生義人



青樹社刊

ママさんの告白日記

目次

哀しき男性

七

身上相談所

三四

春の嵐

五九

肌色三態

八五

ひめごと

一一〇

男 ま さ り

一三七

物 思 う

一六三

口 惜 し く て

一九一

月 の 夜 道

二二七

四 面 楚 歌

二四一

立 派 な 人

二六九

哀しき男性

一

相手は、確かにMデパートの仕人部の課長で、とにかく、すぐ来て貰いたいとのことだった。

「お客さんから苦情が出たんだ。困るよ、もつと注意してくれなくては……」

場合によつては、お前のところの取引を中止するぞと言わんばかりの語調なのだ。

そんなことになつたら一大事である。

三十余名の女工さんを擁するこの下着製造工場も、Mデパートのおかげで成り立つているようなものだつた。

女社長で、三十八才になる成山伊津子は、今大阪に出張中であつた。彼女はこうした女性専門の下着工場を、大阪と名古屋と仙台に持つていて、独身の身軽さからいつもこの間をとびまわつ

ている。そして、彼女の留守中の責任者は、今年三十才になった青年営業部長の秋田司郎だった。司郎は急いで三鷹駅にかけつけると、中央線で有楽町へ向った。Mデパートは銀座四丁目にある――

本館とは道一つ距てた裏の仕入部の、ビルの薄暗い階段をあがると、課長が手ぐすねひいて待つていた。

「君！　これだ。よく見給え」

と、司郎の前に投げ出されたのは、確かに仙台の工場で製造しているキャミソールである。ブラジャーとウエストニツパーと、コルセットを一つにまとめたような女性の下着だ。

「うしろの紐を通す穴を見給え、左右がまるで合つてないじゃないか」

「はア」

ちようど、スケート靴のように、左右に沢山の通し穴があいていて、そこへ紐をジクザグに通してしめつけるわけだが、なるほど、左と右の穴の位置が、ずいぶんとずれている。

「こんなものを納められては、当デパートの信用にかかわる」

「はア――誠に申し訳ございません」

「一体、君の工場では、製品の検査をしているのかね。この頃のお客さんはな。パンティだろう

とブラジャーだろうと、一度使つてみて具合が悪ければ、堂々と取換えにくるんだ。今や、女性の肌着は、洋服以上に、若いお客さんの関心の的まじになつている。そんなことさえ知らずに、下着だからといつて、こんな不良品を納められては迷惑だ。下着だからいい加減で構わんという考えは、もう一昔前の話なんだぞ」

一席弁じられて、司郎は冷汗をかいていた。

「しかも、今調べたところ、これと同じ不良品が十二着もあつた」

「そんなに！」

「そうだ。幸い、最初に買った人が苦情を申し出て下さつたので、大事にならずにすんだ。もちろん、この不良品はそちらへ引取つてもらうよ」

「はア——」

「今、その応接間に、苦情を言つてこられたお客さんがいらつしやる。君もこれから会つて、謝罪しやざいしてくれ給え。責任は君のほうにあるんだからな」

何を言われても、使われている側の弱さだつた。司郎は承諾しょうだくして、重い足を応接間の方へ引きずつていつた。

司郎は、ただもう平謝りに謝るに越したことはないと言悟をきめた。

ドアが開いた。

「こちらが製造工場の責任者です」

と、課長が責任をなすりつけるように、司郎をひきあわせた。

深々と頭をさげ、やつと顔をあげた司郎は、そこにいる女性をおそるおそる眺めた。

なかなかの美人だつた。殊に、化粧がうまいのか、驚くほど美しい頬^ほの色だ。

「どうも恐縮です」

と、司郎はまた何度も頭をさげ、

「これからは、充分気をつけますから、どうか今度だけはお許し下さい」

「いいのよ。あたくし、そんなつもりで来たんじゃないんですもの」

と、その女性はにこにこした。

「あたくし、ここのデパートの下着のデザイン、とても好きなんです。それだけに、今度のキャミソールにはびつくりしましたけれど、お店の信用のために、急いでお話申しあげただけなんです。そしたら、こちらの課長さんが、今、工場の責任者を呼びつけたから、しばらく待つて言うもんで、それで待つていただけないですよ」

「はア——私はその責任者です。どうも申し訳ありません」

「責任はあなたのほうだけじゃないと思うわ。調査もしないでウインドに並べたデパート側にも、落度おろそかはあるわけでしょ？」

と、女性は一課長の方へ視線を向けた。

なかなか度胸どきょうのいい娘だつた。

課長はいささかたじろいで、首筋をびしやびしやと叩いてみせた。

「ではあたくしこれで失礼します」

「どうも恐縮でした」

「いいのよ。もう——」

にこにこ笑つて立ちあがり、部屋を出ていくこの女性のあとに、かすかな、快い香水の香が漂ただよつていた。

二

一着千四百六十円で卸おろしているキャミソールを、不良品として十二着分返されると、女工さん二人分の給料がフイになる——と、そんなことを考えながら、それでもMデパートとの取引が中止されなかつたことにかすかな救いを感じて、司郎がビルを出てくると、

「もし、もし」

と、誰かの呼ぶ声がする。

びつくりして振り返つてみると、そこに駐車している乗用車の運転席から、白いレースの手袋をはめた手が、手招いていた。見れば、もう疾うに帰つたはずの先刻の娘なのだ。

「あの……ぼくですか？」

信じかねて司郎が立ちどまると、

「そう——ちよつとお乗りにならない？　あなたにお願いしたいことがあるんです」

「ぼくに？」

「時間とはらせませんわ。お願いします」

そういつて、娘は身を反らし、後ろのドアを内から開いた。

司郎はためらつたが、すぐ車にのりこんだ。どうにでもなれ、という気持である。今日のところは、司郎は謝罪者の立場だから、発言権はなさそうだ。

車は少し走つて、間もなく停つた。そこは有名なレストラン「フラウ」の前であつた。

「軽いお食事いかが？」

と、娘は軽快に車をおりて、もう入口のほうへ歩きはじめた。

「しかし、あの……」

「ぐずぐずしていると、変に思われますよ」

「はア」

「さあ、どうぞ」

厭応なしであつた。

テーブルについた娘は、白いレースの手袋をとり、無色のマニキュアの美しく光る指先で、ハンドバッグから名刺^{めいし}を出し、司郎の前へ置いた。

稲田阿規子——とあるだけで、肩書も住所も書いてない。

司郎も名刺を出した。

阿規子はそれを見ながら、

「お若いのにずいぶん偉^{えい}いんですのね」

「いや、どうも……営業部長といつても、三十人ばかりの会社ですから。それに、男はぼくをいれて三人しかいないんです。あとの二人は機械の修理工なんでしてね」

「では、社長さんは？」

「女社長です」

「そう——」

と、阿規子は感心した様子である。

やがて、阿規子の注文で、フランス料理が運ばれ始める。冷たいスープが、この上なくうまい。司郎は、社長の伊津子女史のお気に入り、何度もフランス料理の御馳走にあずかつていたから、作法は心得ていた。

「秋田さん。あたくしが、あなたのこられるまで、どうしてお待ちしていたか、おわかりになりますか？」

阿規子は微笑を崩さない。

「ぼくを叱るためじゃないんですか」

「あたくし、叱らなかつたでしょう」

「はア」

「あたくしね。あなた方に同情しているのよ。今のデパートつて、とつても威張っているでしょう。下請工場の人達は、どんな無理を言われても、泣き寝入りしなければならんですつてね」
「仕方ないんです。注文がなくなつたら、忽ち倒産ですから」

「だから、あたくし、あなたを弁護しようと思つて、お待ちしていたんです。それからもう一つ、女性の下着をつくる工場の責任者つて、どんな方かしら——そういう興味がありましたの」

「いやア、どうも」

司郎はそれを言われると弱いのである。今までに、同僚や知人に対して、そのことでどれだけ肩身の狭い思いをしたか知れない。

阿規子はちよつと改まつて、

「あたくし、実は今、女性の下着の研究をしているんです」

「あなたが？」

「ええ。これでもデザイナーの卵なんですのよ」

「……………」

「それで、あたくしのお願いつていうのは、あたくしの研究した型を、実際に大量生産してくれるところを探していることなんです」

「なるほど」

「あなたのところのキャミソールを買ったのも、自分で着るためではなくて、研究の材料にしたわけなんです。どうでしょう。あなたの工場で、あたくしのデザインの下着をつくつて戴けませんかしら——稲田式という名前で——車のなかに見本が置いてあるんです」

「ちよつとお待ち下さい」